慶應義塾 医学部新聞

発行所
三四会医学部新聞編集室
〒160―8582
東京都新宿区信濃町35
電話(3353)1211 内線64996
会員については会費に購読料が含まれる
発行人　武田　純三
毎月　１回20日発行

信濃町駅前・各種診療
慶應義塾大学病院
●外来診療時間＝午前8時40分～午後12時 午後1時～午後4時（特殊外来）
●電話＝03（3353）1211（大代表）

新春特別座談会

節目の年、次世紀への第一歩

「夜明け前」を乗り越えた先に輝かしい医学部第二世紀が拓ける！

2015年夏、ついに1号館のI期棟が竣工し、新しい病院棟で診療の一部がスタートしました。春には岡野医学部長による新医学部で4つのタスクフォースが稼働しはじめ、10月から医学部、病院、大学院で新執行部が発足するなど、医学部100周年に向けて着実に歩みを進めています。そして、いよいよ2016年を迎え、あらゆる局面において最終段階に入りました。とはいえ、ここは医学部100周年という次世紀に向けたひとつの節目に過ぎません。この年をどのように走り抜け、大きな飛躍を遂げるのか。毎年恒例となった座談会では、清家塾長、岡野医学部長、竹内病院長にお集まりいただき、熱く語り合っていただきました。

（本文中は敬称略）

財政再建を果たし慶應義塾も次のステージへ

―新年明けましておめでとうございます。本日は、平成28年度の抱負とともに、医学部100年に向けた意気込みなどをお話いただきたいと思っています。まずは清家塾長より、就任から6年間を振り返りつつ、これからの義塾および医学部の姿についてお話しいただけますか。

清家　塾長に就任した6年前は、リーマンショックの直後という日本経済が非常に厳しい状況でした。慶應義塾の財政も非常に厳しく、保有金融資産の減価額が535億円になり、そのうち170億円は減損処理しなくてはなりませんでした。そのような状況ですから、塾長1期目は財政再建が非常に大きなテーマでした。そのひとつとして取り組んだのが、学校法人として健全なポートフォリオを回復することです。それだけ減損が出るということは、リスクの大きな金融資産が慶應義塾にあったということですから、それらをリスクの小さい金融資産に置き換えていきました。そして、病院、医学部にも多大な苦労をお掛けしましたが、経費節減をしつつ財政の再建を図りました。その結果、お陰様で皆さんの努力と最近の市場回復のお陰もあり、減損処理額はほぼゼロになりました。

2期目に入ってからも引き続き財政再建に努めていく必要はありますが、将来のための新たな投資を行う時期になったと考えています。そして言うまでもなく、数ある投資案件のうちでも最大のものが新病院棟の建設です。これは総額300億円規模の投資となり、財政再建途上の慶應義塾にとってはなかなか難しい決断でした。しかし、戸山常任理事が新病院棟の必要性を熱心にまた正確に説明してくださり、また戸山常任理事をはじめ病院執行部、医学部執行部の方々が、病院の収入構造などを見直す中で新棟建設に向けたプログラムを作ってくださいました。武田前病院長、竹内現病院長の努力により病院経営が改善してきたことに加えて、末松前医学部長、岡野現医学部長をはじめとする医学部のサポートもあり、慶應義塾として病院の建設に踏み切る決定をしました。

―医学部、病院ともに、その決断に対して、とても感謝しています。

清家　むしろ経営上も新病院棟は極めて大切で、2期目の執行部にとって最大のプロジェクトですから、我々こそ皆さんの努力に感謝しなければいけないと思っています。

もうひとつ、ソフト面でのプロジェクトとしてスタートしたのが、昨年採択されたスーパーグローバル大学創成支援事業です。これにより慶應義塾大学は世界トップクラスの研究大学を目指す13校の一つになりました。その実現に向けて、「長寿（Longevity）」「安全（Security）」「創造（Creativity）」という3つの教育研究クラスターを中心に、慶應義塾の総力を挙げて研究計画を推進していきます。医学部は3つの全てのクラスターとの関わりがありますが、中でも特に期待を寄せているのが、岡野先生にクラスターヘッドを務めていただいている「長寿」です。健康長寿社会を創成していくにあたっては、医学的知見を基礎としたうえで、高齢者が快適に生活し続けられる環境を整える工学的研究、それを支えるさまざまな社会保障や雇用の仕組みなどに関する社会科学的研究、人間が長く生きることをどう捉えるかという人文科学的研究など、総合大学としての慶應義塾大学が持つ総合力を発揮できるテーマです。それらはこれからの日本にとって重大な問題で、身体・認知能力の低下する高齢者がさらに増え、介護人材の需要が増える一方、日本全体の労働供給量が減ることに対してどのように対処するか。それにより経済の潜在成長力も低下してしまうという側面もあり、認知症の問題ひとつをとっても日本全体の成長力を左右する問題だといえます。

塾長
清家　篤

研究・教育でも世界トップを目指す

―昨年春に末松先生から医学部長を託された岡野医学部長には、新しい医学部体制や今後目指すものなどについてお聞きします。

岡野　清家塾長がお話しになった通り、新病院棟建築が慶應義塾における最重要プロジェクトとして進んでいる中、医学部では臨床研究中核病院となることを重要課題として掲げています。今回の新病院棟建設は、別の場所に病院を新築して移るのではなく、古いものを壊しながら新しいのを造り、しかもそこで診療、研究、教育を継続していかなければいけません。そのような中であってもしっかりと学問をやっていくことが大切で、困難な中で継続していくことを意識した体制を作ってきたつもりです。

そして、昨年は重点課題を推進するために4つのタスクフォース委員会を設置しました。その1つ目が、今まさに建設準備中のJSR（日本合成ゴム）との共同研究ビル建設です。このタスクフォースの目的は、産学協同研究の場を理想的な形で展開し、若い研究者たちが主体となってリーダーシップを発揮できるように比較的少人数のグループで研究できる環境を提供します。この構想にはJSR以外の企業も多数興味を持ってくれていまして、病院建設が完了した後のリサーチ環境を整えるきっかけになればと考えています。

2つ目は、慶應義塾の強みのひとつである再生医療のタスクフォースです。ここでは再生医療の安全性と有効性を確認するための審査体制を構築するほか、脊髄損傷や心不全、角膜の疾患などに対するiPS細胞を用いた3つのセルフプロセッシングセンター（CPC）の厚生労働省への届出準備を進めているところです。再生医療については西日本が進んでいる印象がありますが、東日本のトップランナーたる慶應がソフト・ハード両面から再生医療を切り拓いていけるようインフラ面でも整えていきます。

3つ目は、医療ビッグデータとなる医療情報、ゲノム情報の情報ネットワークを構築するためのタスクフォースです。慶應には約100の関連病院があり、慶應病院と関連病院を併せると数万床の病棟になります。そのような体制で共同研究ができれば、世界で最大級の症例数による、世界トップレベルの臨床研究が可能になります。

4つ目は、知的資産と産学協同研究の推進です。アメリカには大学の取り組みから大企業が誕生した例が多数ありますが、日本でそのようなビジネスを生み出す土壌をつくれるのは慶應義塾であるという自負があります。しかも、医学の領域から新しい産業の芽となるものを生み出そうというもので、世界に冠たる新病院を作るのと並行して医学部の取り組みでも世界トップを目指していきます。

―大学院や学生に対しては、どのようなことを考えていますか。

岡野　学部教育では、2020年の東京オリンピックを見据えて、国際的な視野を持って診療ができる医学生を育成していこうとしています。2015年にはワシントン大学のセントルイス校、Broad Instituteと提携を結ぶことができましたので、学生の臨床実習などといった人材交流を進めていきます。また、昨年は塾内の高校から精鋭を推薦してもらい、9月の終わりの時点で将来研究をやりたいという意思を持つ優秀な学生さんを1人選抜しました。今後は外部生に対しても新しい入試を実施して、リサーチマインドの高い学生に入学してもらい、世界で戦えるような人材を一人でも多く育成していきたいと思っています。

医学部長
岡野　栄之（生理62回）

新病院棟を作るのではなくまったく新しい病院を作る！

―現在、新病院棟建設に向けて全教職員が一丸となっていますが、その中心にある竹内病院長は新棟建設の進捗状況などをどのように見ていますか。

竹内　私が病院長に就任したときは病床を100床も減少するという難事業があったのですが、そのような状況にあっても稼働率を上げ、収益を確保しながら病院建設の資金まで確保してもらうことができました。その原動力となるのが新病院棟を心待ちにしてくれている教職員一同の努力であり、結果として病院の収益にも繋がるなど、本当にうれしく思っています。昨年10月から前薬学部長の望月先生が病院薬剤部長に就任されたことも病院にとっては大きな一歩で、これをきっかけに医看薬連携をますます強化していきたいと考えています。

昨年9月10日には、新病院棟の8分の1のスペースにあたる新病院棟I期棟が竣工し、放射線治療部門、放射線診断部門のほか、外来部門としてiPSコンサルテーション外来を含む臨床遺伝学センター外来、認知症などを対象としたメモリークリニック（外来）がオープンしました。また、小児科や一般消化器外科の病棟の一部、さらに慶應では20年の歴史を持つ内視鏡センターも5階にオープンしています。解体しながら新しい病院棟を建設するとあって院内が複雑になってしまい、特に南北の動線が遮断されることで教職員の皆さんにご不便をおかけしていますが、I期棟のオープンは私たちにとっても大きな励みとなり、2017年の新病院棟フルオープンに向けて教職員全員一丸となって進んでいるところです。

このようにハード面が着々と整っている一方で、それに対応するソフトについては十分とはいえません。今までの病院のソフトをそのまま新病院棟に入れたのでは魂が入りませんから、世界に冠たる新病院に相応しいソフトを構築しようとしています。例えば、外来会計については病院玄関近くで一括して行っていましたが、昨年秋から外科外来のみ診察室手前に部門受付を設けて、会計を含む全ての事務処理ができるようにしました。こうしたシステムを順次広げて、1号館、新棟ができたときには全ての外来で部門処理できるようにします。

また、平成28年は医療面でさまざまな変更があり、それらの対応も求められます。4月の診療報酬改定では病院に厳しくなるという予測がありますが、そのような状況でも確実に収益を上げていく努力をしていきます。

―臨床研究を充実させる仕組みとしてどのようなことを計画していますか。

竹内　慶應病院には素晴らしい伝統がありますが、一方で患者さんや紹介していただく先生方には少々敷居が高いというご批判がありました。私たちとしては、慶應病院のよき伝統を守りつつ、臨床研究の受け皿になるような公益性の高い病院を目指したいと考えています。

そのような中で「患者さんに優しい、患者さんに信頼される、患者さんを中心とする医療を行う」という病院理念を大前提として、質の高い先進的な医療が提供できる慶應義塾大学病院となるために、次の100年に向けて仕切り直すつもりです。「慶應病院の風土、気質を変えてでも、新しい慶應病院をつくる」という気概をもって、新病院に向けてソフト、ハード両面で充実していきたいというふうに考えています。

病院長
竹内　勤（内59回）

義塾全体が一丸となって社会問題の解決に挑む

―では、最後に今後に向けたお気持ちをお聞かせください。

岡野　新病院棟をつくっていくにあたっては、慶應医学100周年ということもあり、新しい時代を見据えてつくっていくべきだと考えています。しかしその一方で、伝統の重みも感じているところです。北里先生は医学部創立の際の祝辞で「われわれの新しき医科大学は長年の医界の宿弊たる各科の分立を防ぎ、学内は融合して一家族の如し」といったことを話しておられましたが、この精神は非常に大事だと思います。それは単に気持ちの問題ではなく、基礎と臨床の一体化や診療科同士の結びつきなどを強める仕組みを作っていくことにより、医学部としても再生医療に関する診療科横断的なメカニズムがスタートしていますし、免疫統括センター、がんセンターのような診療横断的なセンター機能、さらには百寿総合センター、臨床研究推進センターのような基礎・臨床の橋渡しをサポートするセンター機能をフル稼働する事により、基礎から臨床へと横串を通すようなインフラとソフト面の整備を実現していきます。

繰り返しますが、新しい病院をつくりつつ、お金を集め、なおかつ高度な診療を維持しなければならない今を例えるならば、一日のうちでもっとも暗くて寒い夜明け前だと思うのです。そんな夜明け前を乗り越え、輝かしい100周年を迎えられるように頑張っていきたいと思っています。

竹内　基礎臨床一体型医学は慶應の伝統ですから、さらに高めていくことは大切です。ただ、臨床医学についてはメディカルサイエンスと訳されていますけれど、直訳すれば臨床医学というよりも臨床科学が正しい。ですから、ここは医学部のなかだけでなく、薬学や看護はもちろん、工学、社会科学、人文科学も含めた慶應義塾の英知を集めて、本物のメディカルサイエンスたる臨床科学を実現する新しい慶應義塾大学病院をつくっていきたいと考えております。

清家　結局のところ、私たちが目指すところは人々の「well-being」を高めることにあり、いかに人々が健康に、幸せに暮らせる社会をつくるかにあると思います。それは医学だけでも、工学だけでも、経済学だけでもできないことで、総合力の真価が問われます。例えば健康長寿社会では、医看薬、社会科学、人文科学といった各分野が総力を挙げてそのモデルを作っていくわけです。ただそのとき中核になるのはやはり医学部、病院ですから、私たちとしても大きな期待を寄せています。岡野先生がおっしゃる通り、2017年から医学部病院の新しい時代が始まるのだとすれば、前年である2016年は夜明け前であり、次の世紀への胎動が始まったところ。ぜひ社中一丸となって明るい夜明けを迎えましょう。

―最後に素晴らしいまとめをありがとうございました。皆さんの熱いお話を聞いて2016年も良い年になると確信しました。本年もどうぞよろしくお願いします。

9月に行われたテープカットの様子
（左から竹内病院長、渡部常任理事、戸山常任理事、清水常任理事、岡野医学部長）

2015年８月に竣工した新病院棟１号館Ｉ期棟

鑑定知来

明けましておめでとうございます。今年は、医学部開設100周年イブの年。皆さまに於かれてはそれぞれファイトを胸に年を越されたことと思います。

私は、昨年5月末にWHOでの任期を満了して日本に帰り、塾長をお助けして義塾全体の国際化をお手伝いするようになりましたが、医療の分野ほど急激なグローバル化に晒されている分野はありません。

大学国際ランキングで東京大学を遥かに引き離してアジア1位の国立シンガポール大学では、その医学部において米国デューク大医学部と同時に学位を得られるプログラムを開始し、英連邦・米国両者をにらんだ将来の医師を養成しています。また、いわゆる国際保健と言われる分野は、チャリティーや国際貢献といった一方通行のものではなく、年率10％で成長する新興国医療マーケットを対象に、様々な背景の人材が国境を越えて集まる魅了ある分野となっています。我が国は、まっ先に超高齢化社会に突入しつつあり、日本の医学医療や社会制度の対応は世界で注目されています。しかし、アジア諸国の高齢化のスピードは日本を超える程です。逆に言えば、彼らから学ぶことも多々あり、それでこそ共生と革新の時代を先取りできるのです。

信濃町にお邪魔するたびに新棟が出来上がってゆくのを見ると誠に胸躍る気がいたします。ハードは新棟が体現しますが、新しい科学的医療を患者さんの為に開拓してゆくという原点に立ち戻り、「ハート」の面での一層の充実も期待されるところです。今まで慣れ親しんで行っていることを一旦見直し、広く国内外の先進事例に目を凝らして最高のものを作り、医学医療を介して患者と社会に還元してゆくという私たちの伝統を発展させる年となることが今年の初夢となりました。

それが正夢となるよう皆で精進しようではありませんか。

新しい年に！

（慶應義塾大学特任教授、元WHO事務局長補　中谷比呂樹　56回）